

同居人の陰謀

黒川 文



目次

1. 同居人の挫折	
1. 同居人の挫折	3
2. 同居人の陰謀	
2. 同居人の陰謀	11
3. 同居人の転機	
3. 同居人の転機	21
4. わたしの陰謀	
4. わたしの陰謀	33

1. 同居人の挫折

1. 同居人の挫折

わたしがペン先に神経を集中させて、漫画の主人公の顔にインクを入れたとき、背後で急に大声を上げられ作業が止まってしまった。大層な仕事ではなかったが、やはり妨害は困る。町役場の広報誌に載せる四コマ漫画の大切な原稿だった。

「ちょっと、やめてよ！」

わたしは机に向かったまま、同居人である彼に怒声を上げてしまった。

「ああ、俺はもう終わりだ」

彼は情けない声を出し、その上、身の上話を始めた。

初めて聞く分には面白さもあったのだが、同じアパートの部屋に住んでいて、わたしはすでに何回も聞かされていた。

わたしは、ペン先に残ったインクをスポンジに吸わせて、机の上に置き彼の方を向いた。彼は、珍しく文芸誌を手にしていた。普段は立ち読みばかりで買うことなど滅多にないのだ。

わたしが興味深そうに見ているのに気づいたのか、彼は今回の事件、と言うほどでもないが出来事のあらましを説明した。彼は二十八歳で町役場を辞めてから、職場での経験を生かし文筆業を第二の生業として選んでいた。作品は出来たものの、地方ゆえのコネのなさから売り込みは新人賞への応募に限られていた。

彼は岡山にある文芸誌である「海猫」に目をつけ、同誌主催の新人賞募集時期に合わせて小説を書いていた。ほぼ毎回だった。しかし、わたしが知る限り、受賞候補になるどころか一次選考にも通ったことがなかった。

彼はバサッと文芸誌を床に投げた。

「そういうことしないの」

わたしはそれを拾い上げて中をばらっとめくってみた。巻末に新人賞一次選考通過の作品名と作者名が列記してあった。応募総数五百通余で通過者は五十通弱だった。一割の確率だ。もちろん彼の機嫌がよくないことから、名前がなかったのはいちいち一覧を見なくても察しがついた。

「もうやめたっ」

彼は、自分の机の横の食器棚から焼酎のボトルを取り出した。

「やめなさいよ、一次選考に落ちたくらいで。それに初めてのことでもあるまいし」

「ふん、志穂にわかるもんか」

そう言って、湯飲み茶碗に焼酎を注いだ。わたしは止めなかった。

わたしはこのとき、自称イラストレータだった。実際には町役場の出している広報誌の四コマ漫画を月に一度描いているに過ぎない身の上だったし、これで生計を立てられるわけもなく、現にアパートはこっそりと援助してくれている祖父の名義だったし、生活費も応援してもらっていた。

目の前で飲んでいる男は高校のときの同級生だ。

わたしは高校を卒業した後、関西の美術系専門学校に進んでイラストの勉強をしてから、また、故郷に戻りアルバイトをしながら描いていた。先生の斡旋で雑誌に掲載するイラストの仕事を紹介してもらったのだった。

彼と付き合いだしたのは、そんな頃だったと思う。高校卒業から二年後の春に、クラスの男子のうちの誰かが幹事を引き受けて同窓会なるものを開いたのだ。恐る恐る参加してみたら、地元に残った男子以外は、短大卒の女子ばかりだった。そこで、——久しぶり、と、声をかけてきたのが松山経済大学の学生だった彼だ。

高校にいたときにはほとんど意識したこともなかったのだが、「大学生」だった彼のことが何故だかすごく格好良く見えたのだ。そして、その当時は、知的で教養あふれ、優しくて包容力のある男性だった。変わったのはいつ頃だったのだろう。

同窓会の後、彼にデートに誘われオーケーしてしまったのをかわぎりに何度か会い、一年後、町役場に就職が決まったときに、恋人の関係になった。

彼の就職三年目に、わたしがパソコンでイラストを描きはじめたときに、専用のインターネット回線が欲しくて彼の近所にアパートを借りて引っ越した。彼もときどき泊まりに来るようになり、私はもう結婚する気でいた。彼もその気だった。

父も母も結婚には賛成の意を示していて何もかも順調だったのだが、転機はこの男が、勤めていた町役場を辞めたときにやってきた。

彼が辞めた理由は、一応、内部ではセクハラだのパワハラだの言うことになっていたのだが、要するに頭の切れる優秀な新入女性職員と喧嘩をして負けたと言うことらしい。先輩職員である彼にその四大卒の若い女が猛然と意見し、彼の知的で教養あふれる論理的な弁舌を軽く論破したらしかった。いや、論破されたことは問題ではなく、負けた後で先輩の地位を使って押し切ろうとして周りに馬鹿だと思われたのが直接の原因だ、と、その後何度も酒を飲んで愚痴をこぼしていたので推察できた。

依願退職の形式は取ったものの在籍六年程度では大して退職金も出ないのだ。彼は、自分のアパートの荷物を整理してわたしの部屋に居候するようになった。

そして、その女、山中菜穂が広報誌の新たな担当者になり、そのときに挿絵や四コマ漫画の描き手を公募に変えたのだ。それまでは、総務課にいた彼が独断で依頼先を決めていたから、広報誌も面白くなかったし、評判も悪かった。しかし、まさかこの事件の後、わたしが漫画を描くことになるとは思っても見なかった。

山中菜穂の編集する広報誌は好評だった。

わたしの四コマ漫画もいつの間にか連載となり、少ないながらも原稿料を頂けるようになってしまい、漫画家と名乗ってもいい様な感じになった。もっとも、これだけで漫画家と言うには本物の漫画家の先生に失礼に当たるだろう。

問題なのは、その女がわたしの妹だったことだ。

現在までの三年間、彼女もまさか自分が追い出した男と同居している漫画家に仕事を回しているとは思わなかったであろう。わたしは電子メールとパソコンのファイルのやりとりだけで済ませていたので、いつかは言わねばなるまいと思いながらも言えずにいる。彼にも彼女にもだ。

イラストの仕事をパソコンに切り替えていたのは正解だったと思うし、手描きの漫画もスキャナーでパソコン取り込んでファイルで送ってしまうので、この仕事に関しては担当者とも会っていないのだ。また、妹とは五歳離れているので、付き合いだした頃に彼を家に連れて行ったときには高校の部活動で忙しく家にいないことが多く、多分、一度も紹介していないか、しても、忘れているかのどちらかだったのだろう。役場には山のつく名前が多いので名字だけではわかるはずもなかった。

そんな訳で、双方にわたしの存在を知られては困るので、漫画に関しては本名の山中志穂の名前は使わず、「山中ぼち」というペンネームを使っている。

彼と彼女とはその一件以来、相変わらず犬猿の仲で、頭を下げたら広報誌に載せるコラムの一つくらいは任せてもらえるのだろうと思うのだが、絶対に下げたことはなかった。彼が役場を辞めてから、早くも三年が経ち、わたしは毎月原稿を彼女に届けるようになり、彼はわたしのアパートに居候して小説を書いて文芸誌に投稿するという生活パターンが出来上がっていった。恋人時代には積極的だった彼だが、居候するようになってからは、あまりわたしを求めてこなくなっていた。そう、あの事件をきっかけに、格好いい男からただの情けない男になっていったのだ。

気がつくと、彼は焼酎の半分残った湯飲み茶碗を、文机の上に置いたまま寝ころんで、すやすやと寝息を立ててしまった。書きかけの原稿用紙のインクは焼酎がこぼれて滲み、

もはや物書きとして失格の様な体たらくである。

いつもは、わたしが原稿用紙からパソコンに打ち込むのだから、滲んでもらっては困る。

でも、わたしは彼を起こさずに肩から毛布を掛けてあげた。起きて文壇や出版社の悪口を聞かされるよりは大人しくして、こちらの仕事の邪魔をしないでいてくれる方が有り難いのだ。

わたしは残りの作業、——墨入れと呼ぶ、鉛筆で書いた下書きにペンと筆を使いインクでなぞっていく地道な作業を黙々と進めた。地道ではあるが、このペン使いで漫画の絵としての出来具合が決まってしまうのは、油絵でも同じである。わたしは緊張感を高めて、主人公の瞳を描いた。

墨入れをしてから、インクを乾かし、残った鉛筆の線を消しゴムで丁寧に消し込み、羽根ぼうきできれいに払った。A4漫画用紙の中央部に小さな四コマ漫画が仕上がった。両手で用紙を目の高さまで掲げて光をよく当てて、塗り残しや消し残し、コマの台詞の誤字がないかを確認した。完璧だった。

それだけ終わると、スキャナーで読み込んでパソコンに取り込んだ。キーボードに酒を掛けられないようにカバーをしておく。明日の朝もう一度チェックしてから、役場の山中菜穂に送信しておかなければならない。

時計を見ると午後六時を指していた。

夕食は二人交代で作ることになっている。生活費は、彼からも少しもらっているものの、はっきりとは言わないが町役場時代の貯金を徐々に取り崩しているらしく、わたしももらうのを少し遠慮していた。

もう十歳若ければ、青春物語の様だが、そうも言っていない。今年でどちらも三十だ。わたしは彼を揺すって起こした。

——ねえねえ、今日は寛之くんの番だよ。

揺ると彼は、じろりと半目を開けた。機嫌が悪そうだ。

「早くしないとスーパーが閉まってしまうよ。コンビニエンスストアにでも行くつもりなの？」

「うるさいな、……今日はどこかに飲みに行こうぜ」

「さっき飲んでたじゃない」

「ヤケ酒のことじゃない。美味しい酒だ」

「ぼけたことを言わないでよ。この町におしゃれな店なんてないわ」

「寂しいことを言う奴だな」

そんなことを言いつつも、彼は買い物に出掛けて行った。

九時頃、粗末な食事が済んで、すっかり彼の酔いも冷めた頃を見計らい、少し新たな作品の様子を聞いてみた。

「.....そうだなあ、書き上げる度ごとに、会心の出来と思うんだけどな」

「後から読み返すと、そうでもないんでしょ？」

「いや、そう言う訳でもないんだ。確かに役場を辞めた最初の頃は、後で読むと自分でも恥ずかしく感じたものだが、今ではそうは思わなくなったぞ」

「威張らないで」

「恥ずかしいことも恥ずかしいと思わなくなってしまったのかな？」

「そんな殊勝なこと言わないで」

「じゃあ、審査委員が悪いんだ」

「単純ね。でも、仮にそうだとしたとしても何の解決にもならないよ」

わたしは、このとき、彼が山中菜穂に頭を下げて町の広報誌の仕事をもたらうことを望んでいた。自分自身の経験から、例えわずかなスペースを埋めるものでしなくても、ゼロと何かあるのとでは大違いだからだ。創作者自身にとっても大きな違い、.....それは何かはわからない、そして、世間の目に触れることによる、何らかのネットワーク効果があると思えたのだ。実際には、わたしの絵は世に出ることはなかったが、漫画として過去三年の期間、広報誌の片隅を飾ってきた。

「あのさ、改めて思うんだけどさ、.....」

彼は神妙な顔つきでつぶやいた。とうとう彼もその気になったのかと期待した。

「そう、そろそろ、役場の広報誌に頼み込んだ方がいいんじゃないかしら？」

「はあ、何を勘違いしている」

「勘違いじゃないわ。今では町のお年寄りまでもがあの漫画を読んでいる。芸術だのとやかく言う前に、楽しみに読んでくれるファンからの嬉しそうな顔の方が励みになるよ。それに、次へのステップにもなるかもしれないわ」

「格好いいことを言うなよ。志穂だって、ぼち先生で通っているかもしれないが、それだけの話だ。町を一步出たら誰も知らないんだ」

彼は妙に毒づいた。

「それなら、どうしようって言うのよ？」

「自分の作品を載せてくれないと言うのなら、載せてくれる文芸誌を自分で作ろうと思うんだ。中川寛之責任編集で、スポンサーを募って雑誌を作る。どう思う？」

「どうって、同人誌みたいなこと？」

2. 同居人の陰謀

2. 同居人の陰謀

わたしは首をかしげる振りをした。頭から否定せず、少し間を持たせたのだ。彼の言うことは完全に自費出版と同じだし、小説を書くということは印刷されることに意味があるのではなく、広く、読者の目にさらされることにある。この町で小さな文芸誌を自分の手で印刷しても、書き手は彼しかいないだろうし、読者に至ってはゼロだろう。いや、わたしは別だ。きっと、最初に読まされて感想を求められるに違いない。

彼の小説はけっしてひどいものではない。むしろ、面白いと呼べる部類に入るだろう。登場人物は個性的でステレオタイプな扱いを受けていないし、ストーリーにもちゃんとメリハリがありクライマックスまでついている。ただ、それが純文学に必要なかどうかは、評論家でもないわたしにはコメントは出来なかった。

——うん、面白いと思うよ。が、毎度の感想だったのだ。わたしだったら、絵の感想にそんなことを言われていたら耐えられなかっただろう。

「それにだな」

彼は自分のプランを続けた。夕方の焼酎が脳みその中に染み込んでいるのではないかと思うくらい雄弁だった。

「少し話を広げて、外部からも投稿者を募ろうかと思うんだ」

「はあ、そんな海のものとも山のものともつかぬものに投稿者なんているの？」

「今はいないけど、……海猫以外にも、瀬戸内新聞の文芸欄にも投稿してるじゃないか。あっちの方にも協力者を募ろうかと思っている。新聞一面だと原稿用紙十一、二枚しか受け付けないから、もう少し長くてもいいとなると、結構、話に乗ってもらえるんじゃないかと思うんだ」

彼はとことん楽天的だった。

「そう」

わたしは、そろそろ止めに入ろうと、言葉を頭の中の辞書から探した。

しかし、彼は、——いや、待て、君にも出番はあるんだぜと、わたしの機先を制して悪魔のささやきを口にした。

彼のアイデアでは、募った純文学小説を載せる際に、一作品に一つ挿絵を入れたいということだった。その挿絵に水彩でも油彩でも、山中ぼちではなく、山中志穂の絵を入れてやってもいいと、こういったのである。まんざら悪い話でもなかった。

「そうねえ」

わたしは、つい、いい返事をしてしまった。

次の朝、わたしは町役場の開く時間を見計らって、その前に漫画の原稿をメールで送った。彼の野望も結構なことだったが、わたしには目の前の課題があったのだ。毎月一回の四コマ漫画だが、手を抜くことは画家として許されない。

しばらくして担当者兼編集長の山中菜穂から受け取り確認のメールが届いた。これでわたしもしばらく手が空き、最近始めた登録サイトでパソコンでのイラストの仕事を探した。ホームページや電子書籍に載せる挿絵の仕事を探していた。際どいものや、猥褻なものならいくらでも需要があったが、余り描いた経験がなくプロとして出せないことからもっぱらほんわかした作風の絵に重点を置いて探していた。

その日から彼は、新しく手掛ける文芸誌のための、新たな書き下ろし作品を書き始めた。でも、わたしは少し気になった。仮に文芸誌が出来るものとしてその印刷能力は、町のコピー屋を大きくしたような印刷所に頼むので、そんなに立派なもの出来ない。現に、町の広報誌も白黒オフセット印刷で、十六ページ二枚折りの体裁なのだ。

いつだったか、山中菜穂に印刷のことで聞いたことがあったが、町内唯一の大滝印刷所の能力では、せいぜい百ページまでの簡易製本しかできないと聞いていた。

つまり、出版社が製本所として使っている様な工場を使えない以上、ページ数に制限を設けて、それに載せられる作品を書く、と言うのが正論と言えた。

もちろん、そんな提案をした途端に、中川は噛みついてきた。小説というのは枚数が決まればそれに沿ったテーマが自然に決まる。書きかけの原稿はことごとく役に立たないことになる、と、大文句を言われた。

「それに、ぼち先生。原稿公募の建前から五人くらいは載せないと具合が悪い。百ページで押さえるためには原稿用紙換算で百五十枚、皆、短編で我慢してもらって、三十枚が五編の構成になるだろう。絵のスペースはないぞ」

「冗談よしてよ。五作なら表紙と、挿絵が五枚ね。久々の漫画以外の仕事だわ」

わたしも嬉しかった。それにいつの間にか小説同人誌が決まりつつもあった。

「それから、志穂。あの印刷所では町役場も利用しているんだ。百ページくらいの小冊子が限界らしい。部数はどうとでもなるが、これも予算とのかねあいによって決定される」

「ああ、お金のこと？」

「これは同人誌であって、それは余り期待できない。印刷費用は、出資者と町内の会社のスポンサーを募るしかない。頑張ろうぜ」

「わたしは、イラストを書くのに忙しいのよ」と逃げた。

「他の公募者も探さなければならない。でも、俺たちが瀬戸内新聞文芸部に話をしても聞いてはもらえない。町役場の山中菜穂を利用せざるを得ない」

彼が屈辱感に唇の端を歪ませるのを見て、わたしはどきっとした。

「もう彼女とのことは忘れなさいよ。三年も経った今では、広報誌に関しては一流の編集者なのよ」

わたしがそう言うと彼も少し考え直した風にも思えた。元々はつまらない職場でのマナーの悪さを彼が指摘したに過ぎない。それを彼女が過剰に反応して、それまで、田舎の学校出の事務員しか知らなかった彼にも過剰反応を引き起こし、その結果がセクハラ、パワハラ騒動にまで発展したのだ。

でも、彼は最後まで抵抗した。わたしに彼女との交渉を任せると言い出したのだ。

わたしはそんなことより、この無謀な計画を推進するに当たって、いくつか心配していたことがあった。その筆頭が予算である。例え町にある企業のスポンサーを募ったことで、広告が増えるのでページ数が増えて印刷所が適応できないし、かといって、小説の枚数を減らすのは本末転倒だ。やはり、この八幡町における文化活動を応援してくれる、スポンサーを探すのが先であった。

わたしは、この雑誌が具体的になくても採用される小説が決まるまで、挿絵の仕事などなく自由に動き回ることが出来た。

町役場の山中菜穂には、普段と同じ様に電子メールで連絡を取った。

——八幡町内の文芸同人誌サークルで小冊子を作ることになり、ついでに、原稿を公募したいので瀬戸内新聞にて取り上げてもらえないか？

と言うような文面で送ったところ、すぐに先方に連絡を取ってくれた。

地方活性化の試みとしてミニコミ誌ならぬ、ミニ文芸誌を八幡町から発行すると、小さく報道してもらい、ついでに現在、原稿を募集していることも載せてもらったのだ。小さな新聞社とはいえ、松山に本社を持ち、愛媛、香川、岡山、広島各県に販売網を持ち、各地に取材記者も置いている。この町の人も大勢取っていて、わたしは少し恥ずかしい思いをしたが、まずまずの反響だった。

彼は、この記事により文芸誌のスポンサーがつくことを期待していた様だったが、案に相違して誰からもそんな申し出はなかった。こんなことに資金を出してくれる酔狂な人もいなかったし、景気のいい企業などなかったのだ。ここでは、わたしが頑張った。町の広報誌に広告を出している会社に一軒一軒声を掛けて回り資金提供を求めた。

「景気の悪い町だなあ」

彼は人の苦勞を鼻で笑った。

「そうじゃないわよ。あなたの同人誌が怪しげに見えるだけでしょ。その証拠に応募してくる人は、ちゃんと毎月投稿して、しかも、佳作の人ばかりじゃない？」

「佳作ならいいじゃないか？」

彼は当然のように言った。確かに、佳作に選ばれるだけでも十分に筆力はあると言えるだろう。しかし、毎月佳作止まりで終わってしまう運のなさも同時に指摘し得たのだ。

「ね、よく読むと癖のある人ばかりでしょう」

「ふむ」

彼も納得したが、よく読むと癖があるのは彼の作品も同じだった。個性と言えいいのだが、他人に相手にされないのではない方がいい個性だ。それに、お金の問題は何一

つ解決していなかった。

わたしは、週末を避けて、こっそりと実家に帰り、離れに住んでいる祖父の元を訪れた。木曜くらいなら役場勤務の妹と出くわす心配がないし、父も母も家にはいないはずだった。実際には彼女とは普通の姉妹関係が続いている。ただ、馬鹿な男と同棲して実家を出たまま帰らない哀れな女と思われているし、わたしは彼女のことを東都大卒の頭の切れる冷徹な女と思っていた。要するに天敵、ハブとマンガースの様な関係なのだ。どんな姉妹でもそう言うものだと思っていたが、最近そうではない人もいることに気づいた。

「おじいちゃん」

と、離れの縁側から顔を覗かせて、こそこそと訪問した。

「志穂か。よく来たな。まああがれ」

祖父はわたしの企みなど知らず、気軽に離れに上げてくれた。

「ねえ、菜穂は仕事？」

「さあ、有給休暇とか言っていたが、友達と遊びに行っみたいだぞ」

それを聞いた途端にわたしは主題を切り出した。夕方まで帰ってこないものと思って気楽にしていたが、この話を聞かれると困るのだ。

「あのさあ、雑誌を出すことになったんだけど、印刷費用が足りないの」

「ほう、イラストとやらの次は雑誌かい？」

「そのイラストも載るのよ」

「それはすごいな、いくらくらい必要なんだ？」

祖父は意外と乗り気だった。こちらが逆に恐縮するくらいのお金を提示してくれたが、オフセット印刷の簡易製本なのでそんなにいらないうって少し遠慮してしまった。遠慮したその後すぐに、初刷りがそんなに売れるわけがないから二回目の費用ももらっておくべきだったと後悔したくらいだった。

明日、振り込んでくれることになり、わたしは祖父と祖母の肩を揉んでから、帰ってきた。

アパートの部屋に戻ると、彼が十通ほど積み上げた封筒を開けて、中身を点検していた。瀬戸内新聞の文芸部経由で送られてきた投稿だった。彼は難しそうな顔をして、きれいに印刷されたワープロ原稿の綴じ紐を外して一枚一枚丁寧に目を通して見ている。

「いい雑誌になりそう？」

「ふむ、どうだろう。みんなレベルが低いな」

彼は高飛車なことを言ってのけた。——どこをどうほじくり返せばそんな傲慢な感想が出てくるのだろうか。彼の小説を見てみたいと思った。

わたしは、机の上にあった彼の原稿を手にした。

「ねえ、寛之くんの小説ってそんなに違うの？」

「ああ」

「どこが？」

わたしは原稿を裏返したり、斜めから見てみたりしたが、そんなに出来のいいものとは思えなかった。それに、公募には原稿用紙三十枚としておきながら自分だけは四十枚も書いていた。字数オーバーなど、プロの物書き失格だが、わたしは敢えてその点を指摘しなかった。物わがりのいい可愛い女なのだ。

——どこが、という問いに、彼は答えず、代わりに十通の中から三通を抜き出してわたしに示した。

「これを載せるの？」

「一番いいと思うんだ」

「他のも見せてよ」

「だめだ」

彼はそう言って、他の原稿を封筒に入れて机の中にしまおうとし、わたしはそれをひったくるように奪って読んでみた。どれも、瀬戸内新聞への投稿歴が長いらしく、歴戦の勇者とでも言おうか、甲乙つけがたいレベルの作品だと思った。専門外のわたしが見る限りでは。

——それなのに、彼は一瞬で三通の原稿をより分けてしまった。なぜだろうと疑問だった。

「ねえ、どうしてこの三通なの。理由だけ聞かせて欲しいな」

「文句があるのか」

「別にないけど、本音の所を聞かせてよ」

——そう、本音を確認するだけのことだ。今更、水くさいことを言うような間柄ではなかった。

彼は、渋々、応募者の年齢を指さした。意外と単純な理由で選別していたとわかった。

「五十、六十五、七十。上から三人選んだと言うこと？」

「正直なところ、瑞々しい感性だの、若いセンスだの言う気はさらさらない。これから長いつきあいになるかもしれないんだ。売れたからと言って、こちらを踏み台にしてもらっては困る。それに俺の小説の引き立て役も必要だ」

「ええー、そんなことまで考えてたの？」

「それはそうだよ、急に注目されてよそに持って行かれたんでは困る」

彼の陰謀では、そういうことらしかった。七十までなら平均寿命まで十年以上あるし、五十を過ぎてから大きな転勤も滅多にない。そこそこの小説が書けて、これからもこの同人雑誌に投稿してくれることが絶対条件だったのだ。

わたしが彼の陰謀に荷担することを認めると、早速嬉しそうに原稿の細部をチェックし、細かな訂正はいちいち、電話で連絡を取り合って仕上げてしまった。こちらはそれをワープロソフトに打ち直し、レイアウトするところから始めなければならない。

それが終わるとわたしは、挿絵の制作に入った。

彼は水彩画のタッチがいいと言いだした。

「作品のテーマとか、関係ないのかな？」

わたしは婉曲に文句を言った。

「挿絵の題材は、掲載作品のテーマを象徴するものでなくてはならないが、絵柄とタッチは、雑誌の顔になるんだ。上品な水彩画で統一しよう」

彼の頭の中にはすでに、綺麗な文芸誌の姿が出来上がっているようだった。それに、ものの言い方が、町の広報誌の名編集長である、山中菜穂に似てきているのが気になった。本人は気づいていない様だったが、多分、性格に似たもの同士なところがあったのだろう。仲が悪い理由がわかったような気がした。わたしと彼とがうまく行っているのは、姉妹でないこと、男女の違いから来ているような気がした。もし、菜穂が妹でなく、そして、同性でなかったとしたら多分そんなに嫌な奴とは思わなかっただろう。彼のように。

しかも、同人雑誌の名前もすでに考えているようだった。わたしがスポンサーだと言うような、無粋なことを言わなかったために彼も少しは遠慮していたようだった。

「志穂は何か考えているのか？」

「お花の名前がいいかな。ひまわりとか」

「もう少し、由緒ある名前をつけよう。古典がいい」

そんなことを言い出した。

「石頭とか？」

「それはジョークのつもりか？ おもしろくない」

「だって、古典なんか読まないもの」

「石で口をすすぎ、川の流りに枕す、と言うのがある。ある僧侶が言い間違えたのを認めずに、石で口をすすぐのは歯を磨くため、川を枕にするのは頭を洗うためだと言い張ったと言う、世説新語からの引用だ」

「何か聞いたことあるようなフレーズだよ」

「漢字で書くと漱石枕流《そうせきちんりゅう》で、夏目漱石がペンネームにした有名なフレーズだ。あっちの頑固な編集長に対する皮肉もこもっている」

彼はそう言ったが、わたしは菜穂のことを、自分のミス認めない頑固な女とは思わなかった。冷徹ではあったが、他人のミス認めない代わりに、自分のミスに対しても厳しいタイプである。だから、人に嫌われるが、仕事は出来るのだと思っていた。わたしは、自分に甘いし、他人にもその十倍は甘い、従って仕事など出来ないのだ。

「結局、漱石枕流っていうのが名前なの？」

「駄目か？」

「うーん、駄目とは言わないけど、題字が漢字ばかりだと堅苦しいし、使えるフォントが草書体くらいしかないから、……寛之くん、お習字やったよね？」

「俺は字が汚いぞ」

「だったら、駄目じゃない。平仮名にしてよ。デザインが楽だから」

「そんな理由は却下する」

結局、彼の意見を取り入れる形で、「漱石枕流」と決まってしまった。わたしは不満

だったが、表紙イラストは毎回変えるという条件で妥協してしまった。人生とはそこそこ妥協していける方が楽しく生きていけるものである。なまじ、面子だ規則だとやっているのと彼のように新入女子職員に足元をすくわれるのだ。

わたしは、表紙の分を入れて五枚のイラストと挿絵を一週間掛かりで描き上げ、前もって用意しておいた原稿用紙とあわせてクリップで綴じる段になり、自分のサインを忘れていたことに気づいた。

祖父に、雑誌に載ると言ったものの、山中ぼちでは騙されたように感じるだろうし、ぼちとわたしが同一人物というのが菜穂にばれても具合が悪い。結局本名での作品発表は見送り、広報誌のイラストレータ山中ぼちの名前でこちらにも参加するという形を取った。

これを、大滝印刷所に持って行き、二百部頼んだのだ。

出来上がりはすぐで、彼の喜びようも一塩で、何もしていないくせに、大きな顔でビールを出せと命令されてしまった。

「まあ、一本くらいいいかな」

「ぼち先生も頑張ったんだから、一杯くらい飲めよ」

「それではお言葉に甘えて、おとっと」

わたしは、ビールのコップに注がれた苦い液体を食道へと流し込んだ。美味しいと感じるその横で、茶色い紙に包まれた二百部の「漱石枕流」が威圧感を放っていた。彼は出来上がったことですっかり満足しきっているようだが、これからどうするのだろうかという不安がふつつつと、ビールの泡のように浮かんで消えていく。

彼はビールの入ったコップを片手に、新しく刷り上がった一冊を抜き出してページをめくり、にやりと笑った。一応一部九百八十円の表示はつけたものの、この原稿に応募してくれた方々と瀬戸内新聞、そして、応援してくれた祖父にも贈呈しなくてはならない。さらに、町の役場や図書館、学校にも寄贈しておかなくては格好がつかないと思った。

「ねえ、寛之くん。残りの部数なんだけど」

わたしはどこで販売する気なのかと責めるような目で彼を見つめた。

「うーん、ネット販売がいいかな？」

「馬鹿じゃないの。有名雑誌ならともかく、無名だし、簡易製本だし、……」

さらには、大したことの無い山中ぼちの扉絵だし、大したことの無い作品ばかり収蔵しているしと、言いたかったが、それを言ってしまうと彼を傷つけた菜穂と同じことになってしまう。でも、こんな婉曲な表現でわかってくれる男ではなかった。

「いいよ、俺がホームページを作ろう。パソコンを貸してくれ」

「え？ 出来るの？」

わたしは綺麗なインターネットショップの画面を想像した。

彼は、わたしのパソコンの前に座ると、かたかたと、キーボードを操作し始めた。

「前の町役場のホームページも俺が作ったんだ」

「そうなんだ」

八幡町の紹介をするために役場がホームページを持っていると言うことは知っていたが、彼の作品であることは初耳だった。誰もアクセスしないし、無愛想で無味無臭、乾燥した感じとでも言うのだろうか、あまり意味のない情報ばかりを列記しただけのものだったが、聞く前にけなさなくてよかった。

あれと同じようなホームページを作ってそこに、雑誌譲りませみたいな記事を載せておくのだろうかと思になった。横から見ていると、マウスでクリックしたらメールの注文画面が表示されるような機能をつけたりしていたが、わたしはおそらくそんな注文を受けることはないような気がした。

ホームページが出来上がりつつあり嬉々とする彼の横でわたしは、第二号の刊行をどうするんだろうという漠然とした不安に襲われつつあった。やはり、祖父から二回分のお金を投資してもらえばよかったと悔やまれてきた。

彼が、「漱石枕流」を嬉しそうに茶封筒に入れ、関係者に郵送し、町役場や図書館に配り歩いた後、わたしはこっそり、様子を見に行った。彼も今でこそたんなる居候だが、三年前まではれっきとした町役場職員だったのだ。その彼が配り歩いて嫌な顔で受け取る人などこの田舎の町では、いるはずがなかった。気になるのは受け取った後の彼らの行動だった。

祖父は、わたしの挿絵だけ切り取って額縁に入れて飾っているだけだったし、図書館では郷土資料の棚にぼつんと置かれ、誰も手に取った気配などなかった。

わたしは、覚悟はしていたが少し落胆した。

3. 同居人の転機

3. 同居人の転機

夕食の準備をしに、町に出てスーパーの野菜売り場を見歩いていた。冷蔵ケースから出てくる冷気が霧状になっていた。きっと湿度が高くてむしむししているに違いない。わたしは、菜っ葉を一束かごに入れ、肉と一緒に煮物にすることを考えた。前から彼の酒の量が増えつつあったのだが、おつまみのおかずは余りよくない様に思えたのだ。特に、あの文芸誌が部屋の片隅に積み上げられてからは、少しハイになっていたのかもしれない。

誰だって、自分の文章やイラストが印刷されて製本されたらうれしくなるものだし、書店に並べられたなら、それが誰に買われるかをずっと一日見張っていたっていいくらいだった。実際にそんなことをする人はいないと思う。

考え事をしながら肉売り場を通過して、かごの中に牛肉ロースがいつの間にか入っていたのに気づいた。

——これだけでおかずになるじゃない。

わたしは、牛肉を丁寧に元あったと思う場所に返し、合い挽き肉に変更した。今日はあくまでも菜っ葉の煮物のだしなのだ。例えて言うなら、あの文芸誌のイラストのようなものだ。これだけ持ってレジにならんだ。

帰り道に商店街の書店の棚を覗いてみたが、最初に役場の紹介で置かせてもらった一冊が、まだ、ちゃんと、そのままの角度で置かれてあった。イラストがちゃんと人目に触れるのは、山中ぼちとしては嬉しい限りだが、営業上の観点からは困ったことであった。わたしが勇気を出して、客の振りをして買ってみようかなと思ったが、でも、そんなことをしたら最後、もう、永遠にこの店から消えてなくなるような恐ろしさもあった。何せ注文伝票も、ブックコードもついていないのだ。追加注文は役場に出すしかないという代物だった。

わたしは、その一冊をそっと手に取りページをめくり自分のイラストが書店の棚の雰囲気壊していないか、慎重に確かめた。彼の小説も書店で立ち読みする限りは、大きな出版社の文芸誌と比べてもそう見劣りするものとは思えなかった。でも、ネームバリューの差はおおきいのだ。牛肉と同じだ。見たことも聞いたこともない動物の肉だったら、絶対に誰も買わないし、ただだとしても絶対に食べないだろう。それが、牛肉というパッケージだけで誰しも不用心に口に入れてしまうのだ。小説だって同じこと、よく噛んで味わえば、と思うのだが、多分、みんな忙しすぎてじっくり吟味する暇がないのだろう。いや、よく考えてみれば、じっくり読んで吟味したら、その後その本を持っ

てレジに並ぶ必要がないではないか。と、馬鹿なことを考えていたら、店主が話掛けてきた。小さな町ならではのことである。

「その雑誌は、昨日役場の紹介で置いていったんだ。面白いだろう」

「え、ええ、そうなんですか？」

わたしは他人の振りをしてしまった。

「書いている人は瀬戸内新聞に投稿している人が多いね」

「あれ、調べているんですか？」

「結構、地元の人も投稿しているんだ。他人の作品だったら読まないけど、知り合いのだったら、買い占めちゃうよ」

「へえ」

「みんな、レベルアップしているね、最後に書いている人は十年前から覚えているけど、格段に上達している」

「あの、最初の人はどうなんですか？」

「彼の名前は知らないなあ。どうしてこの作品が筆頭に來たのか、わたしも疑問に思っていたんですよ」

店主はそんなことを言った。知らない振りをしてよかったと思った。

「因みに、これが売れたら追加注文するんですか？」

「さあ、どうしようかなあ。地元誌だから一部は記念に自分で買うつもりだけど、他に売れそうならねえ」

「きっと売れますよ、多分だけど」

「はは、宝くじみたいだね」

店主はわたしの相手をするのを打ち切り、乱雑に積まれていた本をさっさと整理して、その手でレジに向かってしまった。わたしは手持ちぶさたに買い物袋を持ったまま、その辺の雑誌を触ったり手に取ったりしていたが、肉が傷むのが気になり足早に店を出た。

アパートに帰ると、彼は部屋の灯りもつけないまま、机のランプだけで漱石枕流を眺めていた。机の上に、おそらくわたしが帰るのを待ちきれなかったのであるとみえ、焼酎の入った湯飲み茶碗があり、右手には赤のボールペンが握られていた。

「ただいま、遅くなってごめんね。すぐに夕飯の支度するから」

わたしは、けなげな奥様の様な口ぶりで遅くなったわびを入れた。

「ああ」

「何してるの？ まだ校正する気なの？」

「いや、次の号のアイデアを考えているんだ」

「ちょ、ちょっと冗談はよしてよ。第一号がほとんど売れてないのに、第二号なんて出せるわけじゃない」

しかし、彼は続けることに意義があるようなことを言い出し、わたしは、町の人の評判すら、あまりよろしくないことを持ち出し、双方が珍しく喧嘩になってしまった。

出会ったときから、彼が一方的にことを進め、わたしが不満に思いながらもそれにつ

いていくスタイルが定着してしまっていたが、ここに来てやっと衝突したという感じだった。本当は少しくらい反発していかないととは思っていたので、好機到来でもあった。彼は夕飯も食べずに酒を飲んで寝てしまい、わたしは布団を彼から最大限遠ざけて眠りについた。

次の日も、お互いに口数は少なかったが、事態を好転させるために、わたしは雑誌の訪問販売を考えついた。彼の顔には不満がありありと見えたが、ことここに及んでは印刷代を回収するまでは第二号のことは棚上げにせざるを得ない。わたしは町の議会と予算の関係にたとえて彼を説得した。

しかしながら、にわか訪問販売など、初戦からくじけてしまった。台所用品ならいざ知らず、文芸雑誌など別段、興味のない人には全く必要のないものだったのだ。

「あーあ」

三日くらいして、わたしたちは諦めの境地に達していた。

転機が訪れたのは、彼のポケットの中からだった。

——あれ、携帯電話？

壁に引っ掛けてある彼の上着のポケットから電子音が鳴り響いた。彼はトイレに入っていてわたしが、おそるおそる指先でつまみ出してみると、着信表示に町役場とあった。一瞬出るべきか迷ったが、出てみた。

「はい、中川でございます」

「あら、町役場の山中でございますが、中川寛之さんのお電話ではなかったですか？」

「いえ、あの、……」

山中菜穂からの電話だった。わたしは声で自分のことがばれたのではないかと、あわてふためき、無駄だと思いながらも指で鼻をつまんで声をごまかした。

「……わたくし、中川の妻でございます。ご用件を承りますが？」

どきどきしながら、それだけ一気に口にした。

「これは失礼しました。実は中川さんが先日編集なさっていた、文芸誌のことで相談申し上げたいことがあります。出来れば夕方までに折り返し連絡を頂きたいのですが」

「はい、そうですか。では、伝えておきますでございますっ」

わたしは歩きながら通話ボタンを強引に切ってしまい、そのままトイレのドアをどんとたたいた。妹からの電話だと言うことで動揺していたこともあったし、文芸誌のことで町役場から何らかのクレームを入れられるのではないかと恐れおののいたのだ。

——おいおい、何事だい？

扉の向こうで、からからから、と、ペーパーを使う音がして、水が流れ、悠々と彼は出てきた。まだ、ぬれている手でわたしに手を伸ばし、携帯電話をむしり取った。

「もう、切ったけど。折り返し電話ちょうだいだって、女の人からよ」

わたしは淡々と事実だけを述べた。

「あの女ではあるまいな？」

「知らないわ」

わたしは、あくまで白を切り、彼はやむなくそのまま先方に向け直した。彼の頬に顔を寄せて会話の内容を一言一句聞き漏らすまいとした。そんなわたしを見て嫌な顔をし、右手でわたしの顔を押しつけた。

「もしもし、さきほどお電話頂いた中川ですが」

——ああ、山中さん？　ああ、そう。と、思わせぶりな会話がしばらく続いた。

——ええ？　BSK放送が町役場に取材だって？　町長が汚職でもしたのか？

——ふんふん、「こんにちは、日本」の全国放送で十五分も？

どうやら、文芸誌へのクレームではなさそうでわたしはホッと胸をなで下ろした。二十分ほど会話で彼はお辞儀しながら電話を切り、わたしの方を振り向いてにやりと笑みをこぼした。

「これは愉快だ。なんだと思う？」

「さあ」

「お昼の情報番組が、八幡町に取材に来るらしい。メインは大正十年に出来た旧駅舎だが、この町の名所はそれしかないの、十五分の番組枠が埋まらないんだ。それで、この漱石枕流誌も紹介したいと言ってきた。お前、この雑誌を持って何かしゃべれよ」

「駄目よ。人前に出せる顔じゃないもの」

わたしは、謙遜した風を装ってはいたものの、その実、山中ぼちの正体が皆にばれるのをおそれていた。

「それじゃ、俺が出るのか？」

「だって、あなたが編集長なもの」

わたしはうまく、彼を立てる女房役を演じきりこの災難を逃れ、さらに、好機に転じる手段を頭の中で素早く考えた。

仮に十五分間、彼が文芸誌の宣伝をしたところで、買う人が現れるとは考えにくいし、それに、急な受注に応じられる在庫もないのだ。アパートに積んでいる百五十部を処分できてしかも、今後の仕事に生かせそうな方法だ。

わたしは、彼が取材に先立って喋る内容の文案を考えている間、インターネットを触り、定期的に文芸誌を購入してくれそうなお客を捜した。どうやら、官公庁しかなさそうだった。

「おい、喋る原稿をお前も考えてくれ」

「漱石枕流をよろしくって、で、いいんでは？」

「馬鹿だな、せっかくの全国放送での十五分だぞ、コマーシャルだったら何百万もかかる宣伝なんだ。有効に利用しないともったいない」

そう言われても、過剰在庫で困っています、助けて下さいとでも言うのか、その反対に一度は読まないで損ですよ、言う方向で話をするかのどちらかであった。

「あのさ、寛之くん。この文芸誌が、地域の五十代以上の素人作家の協力により完成した地域振興のシンボルです、って宣伝した方がいいよね。図書館当たりで納本させてもら

えそうかも」

「あ、お前、商売をあきらめて図書館だけに納本する気か？」

「ふふん」

口から出任せだったが、図書館をメイン顧客とするのは、部数は限られるものの、毎月買ってもらえることで、安定した売り上げを立てるには丁度よい戦略だったのかも知れない。

わたしは、中川の妻として振る舞うことにし、次の日から町の図書館に行き、買ってもらう交渉をした。今度、町にBSK放送が取材に来て町役場からも協力要請が来ていて、この交渉は比較的楽だった。その結果、郷土資料ではなく、文芸誌として月に一部買ってもらうことになった。

後は放送日を待って、他の町の図書館にも売り込む計画だった。いかに全国放送といえど、放送後一週間もたてば次第に忘れ去られるものだ。だから、その間が全国の公共図書館に売り込みを掛ける唯一のチャンスだった。

もっとも、彼はわたしのそんな苦労も知らずか知ってか、もう、第二号の素案を考え、第二回公募のニュースを瀬戸内新聞に依頼していた。

その日は朝から町中が大騒ぎだった。テレビ局が珍しい、と言うこともあったし、この町が全国放送に十五分も出る、と言うことがおどろおどろしく人々の間で噂された。そんな馬鹿馬鹿しい雰囲気の後、わたしは実際の役場の動きが知りたかったので、彼には一日お暇を頂いて、実家に戻った。

父からは勘当されているので、祖父母の部屋に上がり込んだ。

「おお、おお、志穂もすっかり立派になって」

祖母はわたしの顔を見るなり涙を流して喜んだ。

「やめてよ。テレビ局が来るだけじゃないの。わたしの手柄じゃないわ」

「でも、本を出したから来るんじゃないわ」

「出さなくても来る予定だったの、全国津津浦々まわる番組なんだから、いつかはまわってくるものなの」

「そうかい。でも、出たくても出られない人もいるんだから、仏様に感謝するんだよ」

「わかってるわ」

——放送担当の仏様っているのだろうか。と疑問に思った。

昼前になると、祖父母もそろってカメラの後についてぞろぞろと歩き始めた。実に馬鹿馬鹿しい行為である。一緒について歩いたって映してもらえるわけではないし、何を映したか知りたければ、生中継なのだから家のテレビで見ればわかることなのだ。この町の人たち全員がそのことに気づいていないのか？　でも、それを知っているわたしも一緒に行動しているのだから人のことは言えなかった。

放送は駅の横にある旧駅舎からの中継と町役場が中心に映し出された。役場は広報担当職員の山中菜穂だ。普段はしない化粧を、今日はテレビ局のメイクさんにされたのか、ものすごく顔が濃くなっていた。衣装も派手だった。役場用のスーツのはずだが、多分松山のデパートまで行って買ってきたのかイタリア製のスーツのように見えた。

時間を掛けて準備した割に、放送は十五分で、——ご苦労様でした、の声がかかり、皆は家に録画しておいた放送を見にそれぞれ、三々五々帰って行った。

わたしの営業はこれからだ。図書館でもらった、他の図書館のリストをもらい、中国・四国地方を中心に片っ端から電話を掛けまくった。

——BSK放送で取り上げられた、文芸誌なんですけど。そちら様で置いて頂けないでしょうか？ 書き手はいずれも、瀬戸内新聞の投稿者から選び抜いた実力者で、八幡町内のミニ雑誌にするには惜しいほどなんです。

わたしは、嘘をつかないように気を遣いながら売り込んでいった。

「お、在庫が底をついているじゃないか？」

三週間ほど経ったとき、彼が脳天気な声を上げて喜んでいて、一体、放送からの一週間にわたしがどれほど営業に掛かり切りだったかを忘れていたようだ。喜びついでに彼のすねにけりを入れた。

「売り込みを掛けたのが、図書館をメインに五百カ所で、そのうち、三百五十カ所でしばらく取ってもらうことになったの。だから、今後の印刷部数は、寄贈分を含めて四百部になるわ」

「へえ、すごいな。たいしたことはないが、定期的な仕事になるのはやりがいがある」

「冗談はよして。定期的な売上げが立たないと続けられなかったのよ」

「それから、一般の購入者は相変わらず増えないけど、投稿者がだな。あの放送を境に増えているんだよ。全国誌と思われてしまったようだな」

「何よそれ？」

「瀬戸内新聞の投稿者だけじゃなく、東京の高校生までが作品を寄越してきているんだ。もったいないけど、どう処分しようか悩むよね」

「読まないうちから没にする気なの？」

「元々この雑誌は、瀬戸内新聞の常連さんのための活躍場所だけ、しかも、よそに移ってしまわないように、年齢層を高く設定している。高校生くらいで大きな顔をしてもらっては困る」

彼の言うことは正しかった。東京の高校生の小説なんか載せては、この文芸誌のコンセプトが崩れてしまう。しかし、そんな訳の分からない理由で没にされたのでは、投稿してきた高校生がかわいそうに思えた。何も投稿者の名前が男の子だったから言うわけではない。年齢だけではじかれるというのはやはり不公平な制度だと思ったのだ。

最初に彼が、他の出版社の公募で一次選考にも通らなかったとき、同じ不満を持っていたはずで、だからこそ、雑誌を床の上に投げ捨てたのだ。

わたしは山中菜穂とは直接会わなかったが、全国からこの文芸誌に関する問い合わせを役場の広報誌のところに、受けているそうだった。彼女は彼と頻繁にわたしのいないところで会うようになっていた。

犬猿の仲に見えた二人だったが、元々似たもの同士なところがあり、それに、気の強い菜穂も最近では年とともに大人しくなったようで和気藹々と彼と打ち合わせの時間を

取ることが多かった。わたしは、菜穂に少し嫉妬を覚えた。

彼は上機嫌で帰ってきた。

「おい、あの女が俺のことを認めたぞ」

「自慢するんだ」

わたしは上目遣いに彼を見てつぶやいた。口調とは裏腹に胸の内は苦しかった。

「役場からも注文が取れたの？」

「金の話ばかりするのはよくないぞ。人相が悪くなる」

「勝手なこと言わないで。そのお金がないと印刷すら出来ないじゃない！」

「おいおい、怒るなよ。まあ、役場としては一部あれば十分らしいが、今後とも町の名物の一つとして宣伝は続けてくれるそうだ」

「そうなの」

わたしは、菜穂と彼が楽しそうに、文芸誌の未来について語り合う姿を想像した。想像の中にわたしの姿はなかった。

話が終わると彼はいそいそと、集まった原稿を検討し始め、住所、年齢別に分別していった。わたしはそんな彼の背中を見て、もはや、漱石枕流の思想が彼の中に残っていない気がした。

わたしは、商店街をぶらぶらと歩いていた。お昼ご飯の買い物に来ている女性たちでにぎわっている。テレビの放映があってから、二人がすれ違ってしまうことが多く、アパートの部屋にいるのが何だか息苦しい。

女性たちの会話ている風景を見ても、別に変ったことなどない。テレビで宣伝されたからと言って、文芸誌片手に文学論を戦わせてくれたわけでもないし、それなら、こちらとしてはラッキーだったが、最低限の費用である印刷代の回収までこぎ着けたのは、はっきり言うと、テレビの宣伝だけではなく、それに乗じたわたしの営業のおかげだと自分では思っていた。それだけに、彼が、雑誌が注目されたと勘違いして、増上慢になったのが、何とも腹立たしい思いだった。

——わたしは何に腹を立てているのだろう。

ふと、我に返り理由を考えてみた。彼が浮かれるのは昔からのことだし、そんなお調子者をわたしはずっと支えてきたのだ。今更怒る理由はなかった。わからなかった。

いつものスーパーの前を通りかかり、夕飯の買い物をしておこうと思い立った。

かごを取り、メニューを考えながら一周するが、何も思い浮かばなかった。関心が完全に別の方向に向いていた。わたしは、夕食のおかずは後で買いに来ればいいし、一度くらい、彼の言うように何処かに飲みに行ってもいいと思っていた。いつも、辛気くさいことばかり言って、彼を菜穂に取られたらどうしようとするありもしない恐怖に捕らわれていた。

空のかごを戻そうとしたが、パン売り場のおばさんが知り合いの人だった。

「これ新製品なの、買わない？」

彼女は食パンを積み上げる手を休めてそう言った。

「はあ」

気のない返事をして、一つ食パンをかごに入れた。新製品とパン屋さんは言うが、味が分かるほど美味しいパンなど食べたことがなかったし、パン一斤に何百円も払う人の気が知れない。新製品だから買うのではなく、一個百円だから買うのだ。

食パンだけのかごをレジに持って行くと、シールの台紙をくれた。二十枚たまると、動物のキャラクターのトートバッグがもらえるというパンメーカーの景品だった。わたしは興味はなかったがパンと一緒にポリ袋に入れた。

アパートに帰ると、彼は夕食の支度をしていた。

「あれ、今日はあなたの番だっけ？」

「違うけど、お前どこかに、スケッチにでも行ったのかと思ってな」

「優しいんだ」

「それから、集めた原稿の選別だが、全部に目を通すことにした。年齢制限はやめて、実力主義にする」

「ど、どうして？」

いいことには違いなかったが、心境の変化と言うにはあまりに急すぎた。彼の考えていることが分からなくなりつつあったことと、山中菜穂と急接近していることをどうしても頭の中で結びつけてしまう。

彼は背中を向けたまま答えなかった。

その夜、わたしは数年ぶりに彼を誘った。こうしないと、たまらなく不安だったのだ。でも、彼とした後に、不安を解消する目的にはあまりに無意味な行為だと悟った。行為の間だけわたしの身体に夢中になってくれたとしても、菜穂の存在を打ち消すことにはならなかった。

余計に不安感を覚えて寝られなくなったわたしの横で、彼は競技を終えた運動選手のように穏やかな顔で寝入っていた。

——変わってしまったのはわたしかも知れない、と思った。

彼の穏やかな寝顔を見ると、蹴飛ばすようなところがあったのに、いまや、その穏やかな顔が自分の前にあってくれることに汲々としていたのだ。

彼はしばらく、寸暇を惜しんで赤いボールペンを片手に投稿された原稿に目を通すようになった。そして、読み終わると、総合点が優、アイディアが並、文章が優、あらすじが良と表紙にマークをつけていった。

傍目には客観性のない評価で公平とは言い難かったが、文芸誌には名物編集長の色合いが濃く現れるものだ。今までの彼を知る人間には信じられない、いや、彼の中の菜穂と通じ合う冷徹な部分がそうさせているのだと、わたしだけには理解できた。でも、全部の小説に目を通すにはまだ時間がかかりそうなほど、投稿は多かった。

「ねえ、あなた、やっぱり年齢制限を掛けないかな。あなたの身体が持たないわよ」

「でもなあ、せっかく投稿してくれるんだぜ。いい加減な選考で日の目を見ないなんてことがあったらお天道様に顔向けが出来ない」

——こういう考え方も菜穂そっくりだ。

「あのさ、寛之くん。山中さんとはよく会うの？」

「はあ？」

わたしが最近、彼のことをあなたと呼んでいたのに急に元の寛之くんに戻したこと、そして仇敵であった山中菜穂のことを持ち出して驚かない方がおかしい。当然の反応だった。

「山中には貸しが出来たんだ。BSK放送の取材に協力した件だ。その見返りに町の広報誌に漱石枕流の応募要領を載せることと、注文票を載せることを約束させた」

「あの人も取引に応じるんだ」

わたしは皮肉のつもりでそう言った。

「彼女もなんだかんだ言って、所詮は町役場の一職員だ。広報誌がなくなれば彼女も失脚する」

「失脚すればいいと思ってるわけ？」

「嬉しそうな顔をするなよ。失脚と一言で言うけど、結構つらいんだぞ」

「そう」

わたしもつらかった。彼女は頭が切れる上に美人で、更にわたしより五歳若かった。情けない男だった彼とは釣り合わないが、全国から注目を浴びている文芸誌の編集長となった今、わたしなんかより格段にお似合いに見えてしょうがない。

わたしは、彼の意に沿う様に、採点された原稿を分別して整理していった。でも、優だの良だの並だのつけたところで、その選定は微妙だと思ったし、優がつけられた作品の中から更に三通をより分けるのはより困難だと感じた。

4. わたしの陰謀

4. わたしの陰謀

この日からわたしは専業主婦に徹するようになった。もちろん、イラストはさぼることは出来なかったが、合間に出来る程度にセーブしておいた。夕食の準備も彼に順番を回さない。

夜は彼から求めてくる日もあったが、まるで関心のない日もあった。相変わらず不安の種はつきなかつた。

「おい」

三日ほど経ち、彼から相談を持ちかけられ、少し嬉しかった。

「なあに？」

「第二号に掲載する小説なんだけど、実力でこの四通を選ぼうと思うんだ」

「四通も？」

「ああ、俺のは今回休みだ。と言うよりこの四通に遙かにレベルが落ちる」

彼はとうとう、負けを認めてしまった。中を見ると、高齢の投稿者に混じり二十代の若手も一通入っていた。常連さん優遇主義が崩れ去っていった。

「瀬戸内新聞の常連さんを載せ続けるんじゃないの？」

「理想を言えばそうなんだが、この作品も捨てがたい」

「じゃあ、その通りにすれば？ あなたが編集長なんだし」

「うん」

「冴えないわね」

「こんなことしたら、常連さんにそっぽ向かれちゃうかな？」

テレビが来てから強気だったのに急に弱気な一面を見せられ、ものすごく嬉しかった。

確かに常連さんを優遇するのは、この文芸誌にとり死活問題になるだろう。地元のもののが載るから読むという性質のものだからだ。

「あ、いいこと思いついた」

わたしは、叫んで、この間パンを買ったときにもらったシール台紙を持ってきた。

「何かもらえるのか？」

「そうじゃなくてさ、応募者全員に葉書をつけてもらってスタンプを押して返したらどうかしら。五枚集めたら掲載候補にするの」

「五枚？ ふざけているのか？」

「だから、一人で何作品出してもいいわけなのよ、五作出せば一回でたまるし、つまり、長く、多く作品を書ける人のための賞なの」

「ふむ、一発屋に用はないというわけか。確かに切り捨てるのに踏ん切りは付くな」

「ね、この方式が有名になったらどうしよう」

「続くかなあ」

彼は渋々ながらも、他にいい方法が思いつかなかったので、第二号巻末の次号募集要領にその説明を書いた。第二号は若い人の作品を載せると言っても一通だけであったので、そんなに気になるほどではなく、残り三通の常連さんの作品が目立ってしまった。

彼は作家からしばらく編集長になり切ってしまったが、わたしには、挿絵の仕事が残っていた。下絵だけ鉛筆で書き、水彩画をパソコンの画面上で色塗りするという作業を繰り返した。

——なあ。

彼が話掛けてきたので、わたしはどきっとして手を止めた。

「漱石枕流のホームページを作ったじゃないか。あれにも結構問い合わせが来ているんだ」

「そうなの」

「あの、スタンプ方式に何か名前をつけないか？」

「何とか文学新人賞みたいなもの？」

「うん」

「うーん、もれなく当たる文学賞とか」

「景品みたいだ。却下」

「そうねえ、常連さん優遇だから、とっつあん文学賞と言うのは？」

「ああ、それいいや、それにしよう」

「女性差別にならないかな？」

「坊っちゃん文学賞というのがあるからいいんじゃないか」

彼はつまらないジョークで矛先をかわした。

わたしは、週末に実家に帰り、祖父に第二号が出せそうだという報告と、第一号へ応援してくれたことへのお礼を伝えた。祖父は相変わらず喜んでくれたが、わたしの健闘ぶりを称えたのではなく、孫が顔を出したことに対する純粋な喜びだけのようだった。

帰りに母屋をのぞくと、菜穂と顔を合わせてしまった。

「あら、志穂さんお帰りなさい」

「ちょっと、顔を見せただけよ。それに姉を名前で呼ぶのはよしなさい」

「姉？」

何か皮肉を言われそうだったので、わたしは喋り続けた。

「菜穂とこの間テレビに出ていた文芸誌の編集長とは知り合いなの？」

「ああ、元の同僚なの」

「彼とは親しいの？」

「役場の仕事を頼んだだけよ」

「うそでしょ。本当は、……」

軽くあしらうつもりが、わたしは普段からの不安感から彼女を詰問してしまった。

「変な冗談はよしてくれないかな。中川さんには奥さんがいるのよ。わたしがそんなふしだらなことをするとでも思っているの？」

「奥さん？」

「電話を掛けたとき、代わりに出て伝言を伝えてくれたもの」

「そうなの」

わたしは、少し安心した。テレビの取材を依頼したときの電話だった。わたしは、彼女に身元がばれないようとっさに、妻だと答えたが、堅物の菜穂はそれで、彼に変な気を一切起こすことなく過ごしたようで、単にわたしの思い過ごしだったことがわかった。

「あ、そうそう」

彼女は付け加えた。

「あのスタンプ方式のアイデアだけど、インターネットオークションで葉書を売買されないように気をつけなさいよ」

「え、あ、そうだね。ありがとう」

初めて、妹に心からありがとうと言うことが出来た。

——スタンプを押した葉書を売買されないように通し番号を振って、こちらで管理するようにしなければならないな。

わたしも、この、小さな編集部で頭をひねるのが楽しくなってきた。

アパートに帰ると、彼は第二号原稿の最終チェックをしていた。今回は部数が多いからと余計に気合いが入っていた。部数が多くても少なくてもチェックすることに代わりはないはずだが、彼はそうは思っていなかったようだ。

「おかえり」

「ただいま。どう？」

「やっぱり、見るたびに小さなミスが見つかる。しかも、元の原稿の文法上の過ちだから、作者に確認の電話を入れておかないと」

「頑張りますねえ」

わたしは少し冷やかに、彼の背中に抱きついて甘えてみた。

「おい、よせよ」

「ねえ？」

「何だよ」

「わたしたち、このまま結婚しない？」

「ええ、結婚って。どうやって生計を立てるんだ」

「よく言うわ。これまでと同じじゃない」

「同じと言われても、社会的責任とかだな」

「だから、結婚していた方がなにかといいんじゃないかと思って言ってあげてるの。いまだったら結婚してあげてもいいわよ」

「ふむ、……俺なんかでいいのか？」

この期に及んで、まだそんなことを言うとは信じられなかった。

「いいも悪いも、散々付き合っ同棲もして、これ以外の選択肢があるのかしら？」

「悪かったよ」

本当に、いい機会だと思った。この小さな文芸誌をやっていくなればこれがチャンスなのだ。気が変わって、また、作家になろうという野望をもたれるより、大きな利益を上げることはないが定収入になるものを見つけたのだ。これを逃せばもう結婚とか言う話が出てくることはないであろう。

「今度、両親に、もう一度会ってこない？」

「あ、ああ」

「二度目だから、三度目はなしだよ。いい？」

「ああ」

「それから、妹も紹介するけど、驚かないでね」

「驚くほど美人なのか？」

「まあ、そこそこ」

わたしはそう答えておいた。本当に驚くのは山中菜穂と会ってからで十分だ。彼に週末に家に一緒に行くことだけ約束させ、わたしは、第二号の校正作業を手伝った。週末までの軽いサスペンスだった。了

同居人の陰謀

著 黒川文

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
